

「長野県植物誌」に対する所感

奥原 弘人（松本市大村565）

執筆者諸兄の永年にわたる努力によって、本年1月「長野県植物誌」が発刊された。これを座右に置いて毎日目を通し、諸兄の学識に敬意を表しているところであるが、手にして何かと感ずることもあるので、それを述べてみたい。

まず、大冊で扱いにくいのではないかといいことである。そこで、分布図を別冊にしては如何かということである。

個々の種についてみると、オオズミはまれなもののように扱われているが、中信地方では四ヶ所で見ている。写真は松本市の山地で写したもので、花の写真はない。山村の主婦であった妹は、これをオオゴナシと言っていた。ズミをコナシと言う地方もあるので、この呼び方もあるのは当然であろう。

イヌツゲは県の南部に多く、山口村では造林の邪魔になるとしているが、中信地方では庭木として高価である。木曽谷での北限は上松町の中部海拔700m辺りである。開田村などで海拔1200m辺りの林内に多いのはハイイヌツゲである。押し葉にした標本でこの両種を区別するのは困難ではないだろうか。

執筆者の努力にも係らず、漏れている種もありそうである。ビナンカズラもその一種である。先年木曽郡山口村二区の段丘間の斜面で見つけ、枝を挿木したところ、松本市の庭で実をつけるようになった。暖帯植物であるから、下伊那郡にもありそうであるから注意したい。

駒ヶ根市在住の林芳人氏は高校在職中から植物を研究し、退職後はいよいよ熱心のようなものである。近年同市の草地で、ムサシノワスレナグサを見つけ生品を送ってくれた。これはムサシノキスゲとも称し、ノカンゾウとユウスゲとの雑種 *Hemerocallis × exilis* Satake である。自宅の庭に植えたところ、花をつける

ようになった。花はユウスゲになて黄色であるが、花形は少し異なるようである。

木曽郡山口村大戸の湿地に1種のギボウシがある。ミズギボウシに似ているが、花茎の長さ70~90cm、花の数は20個以上で花長は4cmくらいある。近畿、中部地方に分布するアオオモトギボウシであろうか。諸兄の研究に期待したい。

正確を期して標本主義？をとるのはよいとしても、雑誌や単行本に載っている記述を無視するのは如何であろうか。研究の上厳選して採用してもよくはないか。標本と並べ文献という一行があっては如何であろうか。

標本に採集者の氏名を付記する件に混乱がないだろうか。全部の氏名を付記するのは無理であろうから、種として希少なものの、分布的に特徴あるものに限っては如何であろうか。

植物地理の項では、その地区として分布上特殊なもの、種として稀なものに限っては如何であろうか。

区系要素を日本海要素、太平洋要素とするのは海草のように聞こえはしないだろうか。

木曽のヤクシマヒメアリドオシラン

Vexillabium yakushimense Maekawa

奥原 弘人

先年木曽谷の南部で採り、ハクウンランの名で「長野県植物誌」の資料として収めておいた小型の草本はヤクシマヒメアリドオシランであると、ラン科を分担しておられる信州大学の井上健博士に指摘されたが、この草本については信濃毎日新聞社発行の「信州の野草」にも写真でのせてあるのでこれを訂正しておわびするとともに、この草本との係りと分布について述べてみたい。

最初にこの草本を写真に納めたのは1984年8月8日であった。この日はムラサキニガナを見ようと楯誠治氏を誘って大桑村阿寺溪谷へ入ったのである。この草本は県内には稀で

木曾谷にも前に2ヶ所で見えていたが花期を外れていたのので撮影も採集も行っていなかったのである。

この日も山道を歩いて前に見たと思われるところを捜したが見当たらなかったの、帰途につき山道を外れて針葉樹林内(標高700m)の薄暗いところで岩上のコケに混じっている小さな草本を見つけて撮影したのでした。このときの写真は4枚残っている。

続いて同月17日にもこの谷の上流で前に見ているユズリハの雑種と見られるものを写そうと楯氏の協力でこの谷に入り、帰途再び前に見ていたところでこのランを撮影し2人で2点ずつを採集したのが標本として残っている。写真も6枚残っている。その後1989年8月12日には今井建樹氏も加わって同地にはいったが、「信州の野草」に載せているのはこのときの写真である。

これよりも先1977年7月31日楯氏とサクライソウを見ようと南木曾町柿其の落葉樹林(標高600m)で採ったのはアリドオシランの名で納めておいたが、これもヤクシマヒメアリドオシランであると井上博士によって訂正されている。

なお前にある村人からはそのようなものは、のぞきど高原にもあるときいていたので、去る8月22日その方の案内で赴いたところ、それは南木曾与川宇礼の山地で、のぞきど高原に続く標高850mの赤松林であった。点々と何個か見られたが花をつけたのは1個であった。それを撮影し採品を標本として納めておいた。これによって木曾谷の3ヶ所で確認したことになる。

確かなのは以上の3ヶ所であるが、1977年9月22日山口村賤母国有林(標高330m地点)で花の終わったのを見てアリドオシランとして野帳に記録しているのも、分布上から見てヤクシマヒメアリドオシランである可能性が

大きい。

また先頃から大桑村の植物をまとめてみようとして野帳を調べているが、1972年8月28日、静岡大学の志村教授を案内して大桑村長通川の谷を歩いて標高700m地点でアリドオシランと野帳に記してあるのも阿寺溪谷に近いのでヤクシマヒメアリドオシランであったと見る事が出来る。このように見ると木曾の南部にはこの種を5ヶ所で見ただことになるが、この付近ではこの他の各地に分布していることが考えられる。

これをハクウンランとしたのは花形を重視せずに分布から見てのことであったと考えられる。ヤクシマヒメアリドオシランは屋久島で命名され、その分布は大隈半島から南の暖帯から亜熱帯にかけてであるが、ハクウンランは本州に広く分布し、本県でも軽井沢町矢ヶ崎山標高1100m、御代田町石尊山1000m、富士見町落合、波田町黒川での標本が保存されているので、木曾のものもこれである可能性が大きく、次に述べるように写真にも写っている。

またアリドオシランと考えたのは前に御岳などで見ているので、その先入観から花形もよく見ずに記録したものであったと考えられるが、亜高山帯などに分布するアリドオシランと誤ったのは軽率であった。

なお前に述べた1984年8月17日に阿寺溪谷で写した写真の中に花形がハクウンランと見られるものが2枚と1989年8月12日に楯氏が同地で写した写真がある。もしこれがハクウンランとすれば同地は両種の混生地となる。

何れにしても鹿児島県南部からフィリピンにかけて暖帯から亜熱帯に分布し常緑広葉樹林に生えるというこの草本が木曾谷の標高850mの高山までの針葉樹・落葉樹林下に生えるという点は甚だ興味深いものがある。中間の四国・紀伊半島での調査に期待したい。